

巻頭言

地政学研究部門の設置について

高倉浩樹（センター長、教授）



2025年4月に本センターには新たに地政学研究部門が設置された。その趣旨と今後の展望について記しておきたい。昨年の本誌101号におけるセンター長としての巻頭言において、昨今の国際情勢をふまえて、「この地域の過去と現在における対立・紛争・戦争の起源とその対応や解決への道筋」が今後のセンターの新たな重要なミッションとなるという見通しを述べたが、その問題意識にもとづく取組が今回の結果につながった。

1996年発足の東北アジア研究センターは協調的グローバル化のもとでの環境問題や経済・文化交流などの解決に資する文理融合的知見の創出がミッションだった。しかし2010年代後半以降、中国の権威主義化とロシアによるウクライナ侵略によって、東北アジア研究の社会的意義は変化した。紛争・対立の原因と現状分析および平和的共存に向けた政策提言に関わる学術的知見の創出が社会的に求められていると思うのである。同時に、ロシア・中国は世界屈指の多民族国家であり、国民統合と多文化共生が深い関係にありこの点を理解することが、この地域の安全保障を内在的に理解するために必要であると考えている。

こうした問題意識のもとで昨年度、学内外の様々な関係者と相談し、肯定的な助言をいただき、またセンター内の教員との話し合いにおいても賛同を得た。偶然ではあるが、昨年度11月には、東北大学が国際卓越研究大学に認定されたこともあり、その事業に関わる東北アジア研究センターの取組として新部門設置を行うことになった。新部門は「外交・安全保障研究分野」と「民族間関係・紛争研究分野」から構成される。域内の安全保障・紛争・対立の構造的

析とこれを緩和・解決するための制度・倫理の探求を行う一方で、国民統合とマイノリティとの関係に関わる紛争研究の視座を総合化することで、東北アジアの平和を実現するための歴史文化的・地域横断的・政策提言に関わる国際共同研究を実施することを目指している。

ここ10年ほど、センターは「人類史的なタイムスケールによる地域理解」、「大国の統治と民族的多様性からみる地域」、「越境する多様な問題の理解と共有」の三つの柱を掲げ、世界的にも着目される研究成果をあげてきた。今回の地政学研究部門の設置は、上記二番目の研究領域の蓄積を中心に、従来センターでは手薄だった政治学・国際関係論、エスニシティ論を結びつけ、世界的にも独自の研究領域を確立することを狙っている。他の二つの柱に関わる研究領域、例えば、環境史・人類史・気候変動・デジタル人文学などとの協働が可能であることも我々の地政学研究の特長である。私たちが目指すのは、時事的な大国中心の政策や政治過程だけではなく、中長期的な歴史的視座と言語・民族的多様性をふまえて、地政学的状況が人びとの暮らしにどのような変化をもたらしているのか、文化・社会の過程を解明することである。

現在、新部門は寺山恭輔教授と高倉が兼任しており、外交・安全保障研究分野にあっては、この分野で我が国を代表する専門家である兵頭慎治氏（防衛研究所研究幹事）を客員教授として迎えた。本部門の専任教員については現在公募をしており、最終的には4名ほどになる計画である。まだ確立途上ではあるが、東北大学から新しい研究発信ができることになると確信している。

contents

- 1 巻頭言
- 2 私の東北アジア研究
- 3 新任ごあいさつ
- 5 著書・論文紹介
- 6 受賞・成果のニュース
- 7 最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか

- 8 活動風景

私の東北アジア研究

ニホンウナギの未来を科学研究と社会との対話で
切り拓くために：「科学アセスメント」のすゝめ

石井 敦

日本・朝鮮半島研究分野／准教授



ニホンウナギに魅せられて

筆者は2004年以来、20年以上にわたって東北アジア地域にとって重要な漁業資源であるクジラやマグロ、サメ、そして今ではウナギを対象とした研究をしてきた。社会科学として面白いことはもちろん、そうした魚種の生態には魅せられっぱなしである。

例えば、ニホンウナギはマリアナ海溝付近で誕生し、そこから海流にのって東北アジアの各地域に流れ着き、川で約10年以上を過ごしたあと、「故郷」のマリアナ海溝を目指して再び大回遊し、次の子孫を誕生させて一生を終える。鮭とは逆の、降河回遊魚と呼ばれる所以である。また、川から陸上に上がってカニなどを摂餌することもある。条件が揃えばダムを斜面を登ることさえできる。ニホンウナギに生まれ変わって体験したいくらい、ニホンウナギの一生はダイナミックである。

複雑なニホンウナギの資源管理

だがしかし、ニホンウナギに生まれ変わりがたくなるような危機にニホンウナギは直面している。日本人が古くから親しんできたニホンウナギは10年以上前から絶滅危惧種に指定されているにもかかわらず、回復の兆しは一向に見えてこない。そうした状況はここにきて急展開を迎えそうである。

実は、欧州連合（EU）がワシントン条約の国際貿易規制として、資源に悪影

響を及ぼさない取引しか認めない規制提案を準備しているのだ。具体的には、日本でもすでに報道されているとおり、ウナギ属をワシントン条約附属書Ⅱに掲載する提案となる。

このように、ニホンウナギをめぐる問題は、ワシントン条約を含めた国際制度、国内の漁業資源管理、国際取引を含めたグローバルな流通、地域の食文化などが複雑に絡み合う非常に困難な問題である。複雑で困難な問題に対して冷静に議論を進めていくことを可能たらしめる重要なポイントの一つとしては、そのための科学的基盤を整備することが必要である。筆者は、その基盤を構築するための「ニホンウナギの科学アセスメント」構想を提唱し、準備を進めている。この取り組みの特徴は、単に学術的な探求に終わるのではなく、ニホンウナギの資源管理に対する政策的貢献を志向している（policy-oriented）ことにある。また、研究者が自身の社会的責任を果たすための活動でもあるのだ。

科学アセスメントとは何か？

科学と社会との対話チャンネル

科学アセスメントとは、ある社会問題の現状とそれはどう捉えられるのか、その要因、そして解決のための多様な選択肢とその影響について、最新の科学的知見を編纂し、それを分かりやすいQ&A（質疑応答）の形式で社会に問いかけるものだ。その報告書は、特定の政策的なポジションを取らない書き方をするのが特徴である。想定されている利用者としては、政治家、行政、NGO、そして一般市民といったニホンウナギに関係するすべての関係者（ステークホルダー）であり、アセスメントに基づいて民主的な熟議をとって社会問題を解決するためのツールとなる。

そのツールの信頼性を担保するためには、まず、アセスメントに従事する研究者と予算の独立性で

ある。それがなければ、アセスメントは利害関係者の代弁をしているのではないかと疑われ、アセスの信頼性が確保できない。そして、アセスが答えるべき論点を一般市民やステークホルダーの方々から収集する。また、ドラフトができた段階で、外部からの査読プロセスにかけ、いただいたすべてのコメントに対して意味のある応答を行うという、開かれた対話を行うチャンネルを確保する。

日本における科学アセスメント
のモデルを目指して

実は、筆者が構想している科学アセスメントは先進民主主義国をみれば、当たり前のようには実施されている。『2030年：すべてが「加速」する世界に備えよ』（ピーター・ディアマンディス、スティーブン・コトラー共著、NewsPicks パブリッシング、2020年）という本がベストセラーになるくらい、「加速社会」を生きるわれわれが対峙している問題の多くは、AIなどに代表されるように、不確実性が大きい上に、それにどのように対処すべきかという価値観もバラバラないわゆる「厄介問題（wicked problem）」である。これに対処するためには、科学研究と社会との対話を可能せしめる科学アセスメントが必要不可欠である。ましてやポスト真実の時代と言われているように、科学研究に対する信頼が今までにないくらい失墜している今、その信頼回復のためには科学研究の透明性を高め、社会に開いていくことが是が非でも必要である。このニホンウナギの科学アセスメント構想が、他の問題でも科学アセスメントを行うことができるようなモデルケースとなることを願ってやまない。そのためのご支援を皆さまにお願いしたい。



「Special Report on Global Warming of 1.5 °C」 by Thomas Cizauskas は CC BY-NC-ND 2.0 ライセンスの下に提供されています。代表的な科学アセスメントとしてはいわゆる IPCC のものが知られている。

いいい・あつし 東北大学東北アジア研究センター・准教授。専門は国際政治学、科学技術社会学、超学際科学。Earth System Governance Project（国際研究プラットフォーム）の科学執行委員等を歴任。共著者として Sustainability Science 2017 Best Paper Award 受賞。

#1



孫来臣 SUN Laichen

客員教授
[2025.5.15 ~ 8.16]

サン・ライチェン ▶ 中国出身。中米両国で学び、現在カリフォルニア州立大学の東南アジア史教授。専門は近世東南アジア史。軍事史・翻訳史にも関心。

巨人への対処術：東南アジアの対中関係史

東北大学での私の研究では、約 2000 年（西暦 1 ~ 1900 年）にわたる中国と東南アジア諸国との関係史を後者の視点から考察する「外中関係史」の構築を提唱します。

はるかに小さく脆弱な東南アジア諸国は、巨大な隣国・中国に対して、1) 屈服・称賛・模倣、2) 朝貢と貿易、3) 仲裁役の要請、4) 平等の追求と想像、5) 抵抗・議論・欺瞞・軽蔑、6) 国境交渉、7) 嫌がらせと侵攻など、様々な対処法を編み出してきました。これらの手段を通じて、自国利益の最大化を図りました。

本研究は、マレーシアの一村を事例にしたジェームズ・スコットの「弱者の武器」と、中越関係についてのプラントリー・ウォマックの「非対称性の政治」という概念を発展させ、その適用範囲を東南アジア全域と約 2000 年の時間軸に広げます。これにより、小国と巨大な中国との非対称関係において弱者が「巨人」に対処するために様々な「武器」を用いてきた実態を解明し、中国中心主義に対抗する新視点を提供します。

ウナギ類の保護と管理

私は 25 年以上にわたり、水生生物の研究と保全に取り組んできました。回遊性の種、特に軟骨魚類やウナギ属に関心があり、彼らの独特な生活史を守るために必要な管理や政策の仕組みに興味を持っています。これまで、標識調査などの基礎研究から政策立案者への助言まで幅広く携わってきました。

種に焦点を当てた国連条約、すなわちワシントン条約（CITES：絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約）や移動性野生動物の保全に関する条約（CMS）にも関心があり、ウナギ属や関連の横断的課題について、政府や事務局と連携して活動しています。

ニホンウナギの保全や他のウナギ属の利用と取引を理解するため、これまで何度も日本を訪れてきました。今回、東北アジア研究センターで時間を過ごし、石井敦氏やウナギに関心のある研究者の皆さんと協働できることを、大変光栄に思っています。この滞在を通じ、日本におけるウナギの環境的・文化的役割についての理解を深め、新たな関係構築につなげていきたいと考えています。

#2



Matthew GOLLOCK

客員教授
[2025.7.1 ~ 9.30]

マット・ゴロック ▶ ロンドン動物学協会の「水生種および政策プログラム」長。フィールド調査から政策関与まで、包括的に保全に取り組んでいる。

#3



黄小明 Xiaoming HUANG

客員教授
[2025.7.1 ~ 9.30]

シャオミン・ファン ▶ ビクトリア大学ウェリントン校国際関係学教授。専門は東アジアの政治・経済・国際関係。自由主義国際経済秩序と東アジア産業発展の単著執筆中。

東アジア現代国際経済秩序の根源

私は 40 年間、東アジアの政治・政治経済学・国際関係に取り組んできました。北京大学で国際関係の学士・修士課程、USC で博士課程、ハワイ東西センターで国際政治経済のポストドクを経て、1990 年代半ばからビクトリア大学ウェリントン校で教鞭をとり、研究を続けています。

私はこれから東北アジア研究センターで学術交流を始められることを楽しみにしております。現在の研究関心は、20 世紀の東アジア産業発展と自由主義国際経済秩序の拡大がどう結びついたかにあります。特に 20 世紀初頭の東北アジアの貿易と産業活動に関心を寄せています。

東北アジア研究センターは東北アジア研究の拠点として知られています。センターや東北大学の研究者との交流、史料へのアクセスを楽しみにしております。

私は 2000 年代半ばには成蹊大学、2010 年代後半には龍谷大学などで研究滞在を経験しました。今回の東北大学での滞在では、「北の視点」からの研究交流に大きな期待を寄せています。

#4



GRISHACHEV Sergey

客員准教授
[2025.7.1 ~ 9.30]

グリシャチョフ・セルゲイ ▶ ロシア国立
研究大学高等経済学院東洋学部准教授。
ロシアの日本研究者協会で事務局長を務
める。
研究テーマ：20 世紀初頭の日露関係史

日露関係史：新たな アプローチ

日露関係史に関する研究は数多く存在しますが、そのほとんどは政治・外交に焦点を当てています。しかし、この二国間の関係史は、実際にはより広範で興味深いテーマに満ちています。

東北大学に滞在中、私は論文集の出版に必要な資料を準備するつもりです。

現在私は同僚たちと共に、多様なテーマに関する研究成果を発表するプロジェクトに取り組んでいます。1917 年革命前のロシア帝国領で生活していた日本人コミュニティの歴史、革命後に日本へ移住したタタール人の歴史、サンクトペテルブルクと東京で活動した外交官の役割、さらには 20 世紀初頭における両国間の経済・金融・技術交流など、我々ロシア人研究者は様々なテーマについて研究しており、来年にはそれらの研究成果を出版する予定です。

仙台滞在中のもう一つの重要な課題は、「地理学から見た日露関係史」というプロジェクトをスタートさせるための資料収集です。その具体的な内容は以下の通りです。

1. 両国間関係史に関連した最も重要な場所を示した地図集の作成。
2. ロシア、日本、その他の国々において、日露関係史に直接関係した記念物（遺跡、博物館、記念碑）などのカタログの作成。

これにより、日露両国の関係をより多角的に理解し、より深い知識を提供することを目指しています。

商品と商人の動向から都市社会を描く

私は日本近世における商品流通の有り様や、その担い手となる商人が形成した社会集団について研究しています。商品は、生産地から集散地を経て消費者の元へ届くまで、様々な商人の手を介します。そして商人は、血縁に基づく「イエ」、本家・分家・別家から成る同族団、同業者による仲間など、多様な集団に属します。これらが個々の経営、あるいは流通機構にどのような影響を与えたのかを分析しながら、当時の社会構造の解明を目指しています。

とくに地方レベルでの集散地と、そこで活躍した商人に着目し、研究を進めてきました。一般的には知られていない、経営規模は決して大きくはない、数多に存在した商人の動向を追うことで、流通網の隅々まで描くことができると考えています。

また最近では、京都や近江から関東・奥州へ進出した商人の経営に興味を持っています。これまでは北関東を主なフィールドとしてきましたが、今後は仙台をはじめとする東北地方各地の資料も積極的に活用したいと思っています。

#5



寺内由佳

上廣歴史資料学研究部門／助教

てらうち・ゆか ▶ 栃木県宇都宮市出身。
お茶の水女子大学大学院人間文化創成科
学研究科博士課程修了、博士（人文科学）。

#6



石川光年

上廣歴史資料学研究部門／
学術研究員

いしかわ・みつとし ▶ 2024 年東北大学
大学院文学研究科博士後期課程単位取得
退学。博士（文学）。2025 年 4 月より現職。

日本中世の法・裁判と社会

今年 4 月より学術研究員として着任いたしました、石川光年と申します。日本中世の法・裁判を専門としております。

中世の法や裁判は、現在のものとはかなり違っていました。近代的な法や裁判制度といったものがなく、裁判を行うのも幕府や朝廷、あるいは荘園領主などさまざまでした。現在なら日本国民であれば誰でも裁判を受ける権利がありますが、中世の人々は裁判を行う側とのコネがなければなりません。しかし、人々は「裁判を行ってくれる者こそ領主にふさわしい」と、自ら領主を選んでいくようになることもわかってきました。法にしても、権力者が発する法令を受容しつつも、それぞれの場所でルールを徐々に形成し、あるいは（成文法として規定はなくても）「このようなことはあってはならないことだ」と権力者に対し要求するようになっていきます。中世の人々が法や裁判をどのようにみていたのか、少ない史料から追究していきたいと考えています。

#7

帝国日本の植民地統治の歴史的研究



張小栄

情報拠点分野／学術研究員

ちょう・しょうえい ▶ 中国内蒙古自治区出身。博士（学術、東北大学）。東北大学高度教養教育・学生支援機構特任助教（教育）を経て現職。

日本の「満洲国」統治は、重層的な支配構造をもつ植民地統治の歴史です。その重層性は、支配現場の政治的空間に共存する諸勢力の主体性によって形成されました。東洋史と日本史の谷間にある課題としての「満洲国」は、いずれの学問分野からアプローチされても「満洲国」の全体像が見えにくく、支配者と被支配者の二項対立の図式で「満洲国」統治を相対化する分析枠に陥りやすい弊害があります。このような問題意識から、私は日本史・中国史・モンゴル史の分野横断的な近現代史研究を専門としております。考察の対象としては、日本人・漢人・モンゴル人・ロシア人・朝鮮人などの諸民族が共存する「満洲国」です。私は、「支配現場」の研究視座を用いて、帝国日本の「満洲国」統治理念・教育政策・民族政策の解明を通して、植民地研究の新たなパラダイムの構築を目指しています。

4月から、東北アジア研究センターの30周年会議の企画運営を担当しております。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

BOOKS

著書・論文紹介

RECENT PUBLICATIONS



ISBN 978-4-908203-35-0

吾妻家文書を読む 第一集：岩出山伊達家の組織

荒武賢一朗、岩出山古文書を読む会編 東北アジア研究センター叢書第76号 2025年2月刊 text: 荒武賢一朗

上廣歴史資料学研究部門では、岩出山古文書を読む会（宮城県大崎市）と共同で、北海道当別町教育委員会所蔵吾妻（あがつま）家文書の調査および研究を進めている。東北アジア研究センター叢書では、『岩出山伊達家の戊辰戦争』（53号）や『岩出山伊達家の北海道開拓移住』に続いて3冊目となる。吾妻家は仙台藩一門（藩主にとって最上位の家臣）の岩出山伊達家で家老を務めており、今回は江

戸時代における岩出山伊達家の組織を中心に構成することにした。論考編（菊地優子・荒武賢一朗執筆）では、吾妻家文書の概要を紹介し、その特徴となる記録について検討を加えている。本書の大部分を占める資料翻刻編では、江戸時代の地域行政・武家社会の儀礼・家老たちが作成した書類といったテーマにわけて合計26点の古文書を掲載した。



ISBN 978-4-86602-184-3

仙台藩の組織と政策

荒武賢一朗、野本禎司著 東北アジア研究専書第33号 岩田書院 2025年2月刊

text: 荒武賢一朗

東北アジア研究センター共同研究「仙台藩における支配機構と政策決定の総合的研究」（2022・23年度）で、日本近世史を専門とする7名の研究者によって取り組んできた共同研究の成果論文集である。同じく東北アジア研究専書として発刊した野本禎司・藤方博之編『仙台藩の武家屋敷と政治空間』（岩田書院、2022年）の続編に位置付け、再び武家社会と政策にテーマを絞り込んでいる。上廣歴史資料学研究部

門は仙台藩に関する歴史資料調査を積極的に進めてきた。その分析を有意義なものに発展させるため、先行研究の成果と課題を再検討し、新たな論点を提示することができた。また、江戸時代の「大名家」「藩」に関する考察は、全国各地で展開されており、その成果に学びながら武士たちの果たした社会的役割を明らかにしている。



ISBN 9784867730850

対馬西山寺文書の研究

顧明源編 花書院 2025 年 3 月刊

text: 程永超

日本と朝鮮半島の架け橋である対馬。海の玄関口・厳原港を一望できる高台にある鶴翼山西山寺には、これまで光の当たらなかった日朝外交の貴重な一次史料が眠っていた。本書は初めて体系的に整理された「西山寺文書」を通して、中世から近世への日朝関係の実像に迫る。

京都五山から派遣された以酏庵輪番僧たちと共に朝鮮通信使を迎え、日朝外交文書を作

成し、東アジア外交の最前線で活躍した西山寺。17世紀の外交文書集『朝鮮書簡』や明の万暦帝から下賜された錦地袈裟など、貴重資料から浮かび上がる数々の新事実が紹介される。

筆者は「『西山寺文書』が語る近世日朝外交の実態」という章を担当し、17世紀前半の外交文書集『(自雲軒書庫) 朝鮮書簡』および18～19世紀の訳官使・通信使関連記録を紹介している。



ISBN 9784861634062

新しい道を拓く

東北大学教養教育院編集 東北大学出版会 2025 年 3 月刊

text: 程永超、田村光平

本書は東北大学関係者による大学と教養をテーマにした論考集「大学と教養」の第8巻で、新たな方向性を示す研究を先導する9名が、研究の意義や面白さを語っている。本センターからは二名が参加した。

程は第八章「情報と外交—17世紀の幕府・対馬・朝鮮・中国—」を執筆し、日中間の正式な外交関係がなかった中、対馬藩による国書の偽造や秘密工作、さらには朝鮮による情報操作に注

目することで、「情報」をめぐる駆け引きが東アジアの国際関係を形成していた実態を描いた。

田村は第九章「人類史を数理で読み解く—『変化を伴う由来』から生じる多様性—」を執筆し、「系譜」と「蓄積」をキーワードに、人類史の諸事象を扱う数理的アプローチを紹介した。同時に、人類史研究における数理的手法の利用や、オープンサイエンス等の動向が、研究の蓄積性に資することを述べた。

受賞・成果のニュース

膝媛援助教が2024年度日本地理学会賞（優秀論文部門）を受賞

本センターの膝媛援助教が2024年度日本地理学会賞（優秀論文部門）を受賞した。この賞は、当該年度の8月までの過去1年間に日本地理学会が刊行する学会誌に掲載された、総合的に優れた論文の執筆者を対象としている。対象論文「在日外国人の集住は統合を阻害するか：近隣ネットワークの媒介効果に着目した分析」（膝媛・埴淵知哉・中谷友樹；地理学評論 96A-5）では、在日外

国人に対するインターネット調査を実施し、外国人の集住が近隣ネットワークを介してホスト社会への統合にどう作用するのかを定量的に検証した。その結果、集住と統合の間には直接的な関係がないものの、集住が日本人とのネットワークの形成を弱めたり、外国人同士のネットワークを強めたりすることで、ホスト社会への統合が阻害される可能性が確認された。



授賞式の様子（2025 年 3 月 19 日）

ワークショップ & 公開イベント

みんなのコラボで創る、人と海が共生する未来型沿岸地域社会



デレーニ・アリーン
(日本・朝鮮半島研究分野／教授)

会期 2025年2月14日

会場 東北大学片平 WPI-AIMR ビル

2

2025年2月22日(土)、東北大学知の創出センター未来社会デザイン塾は、ワークショップ & 公開イベント「みんなのコラボで創る、人と海が共生する未来型沿岸地域社会」を開催した。研究者や漁業関係者が集まり、海面水温の上昇、気候変動、過剰漁業、人口減少などの影響について議論し、持続可能性と回復力を高めるためのアク

ションについて意見を交わした。本センターのデレーニ・アリーン(教授)は、経済・環境だけでなく、社会文化的視点の統合の重要性を強調し、彼女のプロジェクト SEAQUEST が共同スポンサーとして関わった。この貴重な機会を通じて、参加者は沿岸地域の未来に向けた課題とチャンスを共有し、深い洞察を得ることができた。



イベントの発表者と参加者

シンポジウム

清代モンゴル社会における秩序



岡洋樹
(東北大学名誉教授)

会期 2025年3月8日

会場 東北大学東北アジア研究センター大会議室(436室)



シンポジウム参加者の集合写真

本

シンポジウムは、本センター共同研究「清代モンゴル社会における自生的秩序形成に関する研究」(2024～2025年度)による研究成果の発信を目的として開催された。清朝によるモンゴル遊牧民支配は史上稀に見る高度の安定を特徴とするが、この時代のモンゴルにいかなる社会・統治秩序が形成されていたのかについては、近年文書史

料を用いた研究が進んでいる。本シンポジウムでは、研究代表者岡洋樹による基調講演の後、統治制度を扱う「統治と秩序」、民族間関係やモンゴル人の相続を扱う「包摂と継承」、統治が抱えた矛盾と限界を取り上げた「秩序の危機」の三つのセッション、8件の研究報告で構成され、この分野における最新の研究成果が報告された。

シンポジウム

いま、なぜ、どのように 戦争記憶を研究するか



石井弓
(中国研究分野／准教授)

会期 2025年3月27日～28日

会場 広島平和記念資料館、広島大学未来創生センター

戦

争記憶の国際比較共同研究第2回目のシンポジウムは、岩崎稔氏(東京外大名誉教授、政治思想史)を招き広島で開催した。戦争が世界秩序に変更を迫る“今”、戦争記憶の持つ意味も変わりつつある。なぜアジアで、どのような観点や方法によって戦争記憶を研究するのか、シンポの標題には、時空間、主体、方法の3つの論点を込めた。1日目は原爆トラウマの世代連鎖について当事者の講演と議論を行った。この実態をアジアの他国にどう開くか、原爆被害を

象徴する原爆資料館のホールは緊張し複雑な場となった。2日目は岩崎氏が今起こっている戦争や虐殺から集合的記憶を考える講演を行った。記憶研究の最前線であり、1日目の議論をより広い視野に誘い出そうとする困難な試みとなった。迎えた総合討論では、グローバル化によって世界の記憶表象が相互影響する中、世代間継承されるアジアの国々の戦争記憶をどう研究するか、時間を超えての議論が続き、体力は限界を超えたが今後の可能性を確信される濃厚な2日間となった。



原爆資料館ホールでの講演の様子

川北古文書学習会

根本みなみ

(上廣歴史資料科学研究部門／助教)



上廣歴史資料科学研究部門では、毎週一回、学部生・大学院生を対象に、古文書の解説方法を学ぶ「川北古文書学習会」を開催している。学生の参加理由は「卒業論文執筆に向けて古文書の読解力を身につけたい」「将来日本史を専攻したいので、古文書に多く触れておきたい」といった専門分野に関するものだけでなく、「博物館の見学が好きなので、古文書を読めるようになって展示をより楽しめるようになりたい」「歴史にかかわる学部ではないので専門の授業を履修することは躊躇われるが、子どものころから興味があったので参加したい」など、個人の興味関心や趣味に関するものまで多岐にわたっており、文学部・文学研究科以外からの参加者も毎年見られる。

通常、学習会は参加者の古文書学習の経験に応じて「入門編」と「演習編」の二つに分けられ、前期・後期それぞれ14回の開催が予定されている。入門編では、古文書を読むために必要な基礎的能力の習得を目的とし、くずし字用例辞書の引き方や頻出する文字のくずし方、古文書特有の言い回しや表現について学んでいる。演習編では、古文書の内容読解を通じて読解力の向上を図るとともに、より複雑な古文書を教材とし、記述の細かな違いから古文書で記述されている状況をより正確に理解することを目指している。

本年度は、参加者に古文書学習の経験がないことから、古文書の基礎を学

ぶ入門編のみを実施している。教材としては、知行宛行状や奉公書上といった江戸時代によく見られる基本的な古文書を使用している。学習会では、参加者が解説してきたくずし字をホワイトボードに書き、他の参加者が訂正を行い、それでも解説が困難な文字については、部門教員が解説を行っている。

当初、参加者は初めて目にするくずし字に戸惑い、文字数の判別すら困難な様子であった。しかし、辞書の引き方やくずし字の特徴の見極め方を学ぶにつれ、現在では、部門教員が部首の

探し方や、実際にくずし字を書いてみるといったヒントを示すと、参加者が主体的に辞書を引いたり、文字の候補を挙げたりと、積極的に学習に取り組む姿が見られるようになっている。また、分からない文字については、参加者同士で協力して辞書を引くなど、互いに工夫を凝らしながら読解に取り組んでいる。

今後は、古文書の読解に必要な基礎知識の習得とともに、それぞれの学習目標の達成を目指して、学習会を継続していく予定である。



学習会の様子

編集後記

動き始めるかに見えたウクライナとロシアの和平交渉は、編集後記を書いている5月下旬時点でまだしても先行きが不透明になりました。巻頭言に述べられている新たな研究部門の設置は、本来は喜ぶべきことなのでしょうが、その背景を考えると少し複雑な気持ちになります。(後藤章夫)



東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所型組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第105号

2025年6月24日発行

編集：東北アジア研究センター広報情報委員会

発行：東北大学東北アジア研究センター

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41

TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010

Facebook
をチェック!



X (旧Twitter)
をチェック!

